講義録 「世界に飛び出そう！諸君」

小 林 和 男

さて、私が創価大学のみなさんに講義をするのは２回目です。１回目は２年前で、リモート講義を行いました。創価の皆さんは、どこにいっても真面目で、真剣に話を聞いてくださるので、とても話しやすいです。本日は、私が50年間ジャーナリストとして活動してきたことをお話します。本日のこの講義をお聞きして頂き、一人でも二人でも、ジャーナリストを目指す学生さんが出てくることを期待しています。[1]

実は、みなさんの学ぶ創価大学の創立者である池田大作先生とは、モスクワのプレジデントホテルで、初めてお目にかかり、声を掛けて頂きました。

その日、創価学会の会長がモスクワに来られているとの情報があり、私の記者としての直感で、これはプレジデントホテルで待ち構えておいた方がよいと判断し、ホテルに行ったのです。他社は誰も来ていませんでした。このホテルはVIPのみが宿泊するホテルで、一般の人は入れません。私は記者として何度もそこには行っていたので、すんなり入れました。ロビーで張っていると池田先生が現れました。この時は、クレムリンで池田先生がゴルバチョフ大統領と会見された直後でした。

池田先生との出会いはこれが最初で、また最後となりましたが、その時池田先生は私に向かって、このように声を掛けてくださったのです。

「おう！よく来たね。ゴルバチョフ大統領が、日本に行くことになったよ！」と。

急ぎ日本のNHKに報告し、その日の午後７時のNHKニュースで、ゴルバチョフ氏の初訪日を伝える事ができました。他社は、後から追っかけて報道しましたが、反響が大きかったです。会長とは初めてで最後の対面でした。

さて、私は、長野県八ヶ岳の麓、標高900mの田舎で育ちました。そこには「柳川」という川が、「東から西」に流れているのですが、幼い私は、「川というのは、東から西に流れるもの」と勝手に思い込んでいるほどの田舎者でした。小学生になって柳川は諏訪湖に注ぎ、諏訪湖からは天竜川となって「南に流れ下っている」ことを知り、とても驚いたのです。このことは人が物事を判断する時、いかに客観的な、多面的な情報が重要かという教訓になり

1　本講義録は、2023年12月６日（水）創価大学文学部の開講科目である「言語文化論入門」の小林和男元NHKモスクワ支局長による授業内講演の内容をまとめたものである。創価大学卒業生である小泉武嗣氏による文字起こしの労に編集部として感謝の意を表する。

ました。大袈裟に言えばジャーナリストとしての心構えを、あのとき教わったということです。

中学生になったとき青山学院英文科を出たばかりの先生が担任になりました。情熱的な演劇青年で授業だけではなく学芸会や運動会でも情熱的に取り組みました。そんな情熱は子供達に、先生への尊敬の気持ちを育てます。「お前の作文は面白い。新聞記者になれ！」などとおだてられて新聞部を作り、手書きでガリ版刷りの新聞を発行しました。部といっても取材も印刷も、全て一人の学校新聞です。当時どんなことを書いたかは忘れましたが中学卒業直前の1953年３月最後の新聞の見出しは、「スターリン死す！」だったことだけは、鮮明に覚えています。後に、一生をソ連・ロシアを相手にすることになったのは不思議な運命ですね。

高校でも記者になる希望は持ち続け、そのために英語にも熱心に取り組んでいましたが、高校三年生でどの大学に進むか考えていた時1957年10月４日、志望校を決定づけた事件が起きました。ソ連が世界で初の地球を回る人工衛星（“スプートニク”と命名）の打ち上げに成功したのです。直径58㎝ 重さ83.6㎏の小さなものでしたが、世界に与えた衝撃は計り知れない大きさでした。

これに感動した私は、担任教諭が勧めてくれようとしていたICU（国際基督教大学）への推薦を断り、東京外国語大学のロシア語科だけを受験しました。随分無謀な挑戦ではありましたが、合格できました。運が良かったということですね（笑）。

因みに、“スプートニク”という言葉の意味は、元々は「同行者、連れ合い」という意味ですが、地球という星と共に、宇宙の「旅の道連れ」」という意味なのです。この時から、私の人生も、ソ連やロシアの人々と共に歩くことになったのです。

学科では合格したものの当時の外語大には正式入学の前に面接がありました。1959年４月10日がその日。雨の予想が外れて見事な日本晴れの中、皇室では初めて民間からお妃様を迎えました。民間から嫁がれる（シンデレラのような）美智子妃殿下を、一目見ようと、沿道には53万人の人々が埋め尽くし、多くの国民がお二人を祝福したあの当日、私は大学で最終面接を受け、正式に大学生になったのです。

入学して、一生懸命勉強した、と言えば格好いいのでしょうが、その当時は日米安保闘争（1960年日米安全保障条約改定闘争）の最中で、学校に行っても授業時間になると、教授ではなく学生のアジテーター（煽動者）が安保反対を叫び、「デモに行こう！」と呼びかけ、授業どころではない有様でした。私も不和雷同組でデモにも参加しましたが60年安保闘争の学生デモで、東大の女子大生、樺美智子さんが、警官隊との衝突で亡くなりました。

初めて出た死者でした。しかし、結局、安保改定条約は国会で可決され、学生デモも鎮静化しましたが、デモ騒ぎは私自身の勉強不足の言い訳になっています（笑）。

さて、大学卒業後は、NHKに就職しました。記者職の同期は45名。

NHKでは新入記者社員は全員が、一旦地方局に配属されます。そして、地方で成果を上げた者だけが、東京に呼び戻されるのです。中にはずっと地方局を回り続ける人もいて、そ

ういう人は（地球を回り続ける）「スプートニク」と言われました。私も神戸支局に配属され警察署回りの事件記者を始めましたが、将来特派員になる決意は捨てず、警察の記者クラブでソ連の新聞プラウダなどを読み、他社の同僚たちからは変人扱いをされました。しかし将来の仕事のために毎日の仕事で成果を上げる事を心がけ、素晴らしい先輩記者にも恵まれて大きな事件でスクープをする事ができ、４年後に東京の外信部に異動させていただいて、特派員候補の軌道に乗りました。

1967年、革命50周年を口実にロシアを取材する特別番組「ボルガを下る」を提案し、初めてロシア現地で取材を担当することになりました。ボルガ河はモスクワの北西バルダイ高原を水源に東に流れ大河となり、全長3700キロを流れて最後はカスピ海に流れ込むヨーロッパで最長の大河です。　ロシアの人たちの心の故郷、誇りでもあり名曲や名画のテーマになっていることは諸君も知っていると思います。その誇りをうまく使って、映像取材を極端に嫌うロシアを説得し実現したのがこの番組で、結果を言えば三枝成章さんのテーマ音楽で夜７時半から30分間のシリーズで高い視聴率で成功した番組でした。

結果は素晴らしかったのですがこの取材は外信部の直接の上司と私の間のトラブルの元になりました。ボルガ沿線の取材地域は国際電話はいうに及ばず、通信が全くできない地域です。一ヶ月半に及ぶこの出張期間中に、私の直接上司の外信部長が人事異動で交代していました。ソ連での取材を終えて帰国し部長に帰国の挨拶をすると部長がいきなり大声で「お前、生意気だ！」と怒鳴りつけたのです。30人ほどの大部屋でわけがわからないまま呆然としている私に対し「俺が部長になったのにお前は挨拶もよこさなかった。生意気だ。飛ばしてやる！」と。通信が不自由な地域の取材旅行で失礼しましたと詫びても怒りはおさまらず、部屋の中も静まり返って聴き耳を立てていました。

悩みました。僕はロシアを伝えるためにそれまで努力をしてきて、対外的には良い仕事をしたと確信している。特派員に任命されるのも間違いないと思っていました。そこにこの無茶な非難です。しかも人事に影響力を持っている直属の上司からの暴言です。特派員になれず、飛ばされて地方局を渡り歩くスプートニクになってしまうのか。悩みました。

さて、私はどうしたかというと、勿論、落ち込みました。

妻にはこの出来事は一切話しませんでした。妻は僕が悩んでいるのに気がついていたらしく、妻も胃潰瘍になっていた事がわかりました。

では僕はどうしたか。皆さんだったらどうするか考えながら聞いてください。

どこの会社に行っても、同様なことは皆さんの上にも起きる可能性があります。

どう考えても、自分は悪くない。しかし相手は上司。時を待つしかないと思いました。

どうせなら、その間に、身体を鍛えて、来るべき時を待とう。そう決意したのです。

幸いなことに、NHK の隣には、代々木のオリンピックプールがあります。昼休みになると、歩いてオリンピックプールにゆき、着替えると12時25分。それから13時まで平泳ぎで往復。10往復すると、丁度お昼休みが終わる時間になります。そうして、泳いでいるうちに、身体も軽くなり、頭もスッキリ考え方もポジティブになりました。そうした私を見ていてく

れた方がいたのでしょう。この有酸素運動を始めて半年くらい経ったとき、当時バルカン半島を纏めていたユーゴスラビアのチトー大統領の側近の副首相が訪日しました。

ソ連筆頭の共産圏と自由主義圏の狭間にあって、自主独立の盟主として注目されていたチトー大統領の腹心です。NHK は特設スタジオを用意してインタビューを企画しました。そのインタビューアーに私が抜擢されたのです。

当時の NHK 会長は朝日新聞の特派員だった時代にユーゴスラビアなども担当した実力者前田義徳さんで、インタビューには幹部がスタジオの脇にずらりと並んで見守るという熱のこもった設定でした。そういう VIP のインタビューは、相手に失礼のないように、質問事項を予め書面で提出し、相手が答え易いように配慮することが常識です。また、柔らかな雰囲気を出すためには、相手の人となり等もしっかり事前に学び・準備してインタビューに臨みます。勿論、そうした準備もしっかりした上で、敢えて事前質問には入れていなかった「バルカン問題の現状についてどう思うか、ユーゴスラビアの動きによる西欧諸国との軋轢」といった極めて微妙な、本当は誰もが知りたい質問を本番でぶつけました。

ディレクターはヒヤリとしたと思いますが、カメラは回っています。副首相も私の真剣さに応じて真摯に答えてくれました。この様子を見ていた NHK 幹部達は、「あの男は使えるな」と評価をしてくれたということで、遂に念願のモスクワ特派員に命じられたのです。

さあ、念願のモスクワです。しかしここは共産主義国。生易しい体制ではありませんでした。取材もインタビューも先ずは書面で申込み。質問事項も予め提出し、国家機関の承認を得ておかねばなりません。日本人が知りたい問題であればあるほど取材許可が下りず、全く仕事になりません。仕方がないので、国家の公式報道機関であるタス通信の報道を翻訳して、日本に流すだけという、従前からの報道をするしかありませんでした。

自分がやりたいのは、ここで生きるロシアの人々のありのままの姿です。勇んでモスクワに乗り込んだものの報道管制の厳しさにまたストレスが溜まる一方でした。

幸いなことに、モスクワ支局の近くには、国営のオリンピックプールがありました（笑)。東京の時と同じく毎日のように泳いでストレスを解消しました。そうしている内にプールの監視人と仲良くなりました。或る日、この監視人が、「隣のプールで泳いでもいいよ」と誘ってくれました。そのプールはオリンピックの飛び込み選手が練習できる深いプールです。深いプールは身体が浮きやすく、とても気持ちいいのです。或る日、このプールで若い女性たちがグループ泳いでいました。美人揃いにみえました。「見たぞ、これが特権階級の子どもたちの姿だ！」と思い込み白けた気分になりました。ですが、不思議なことに気が付きました。若い女性達は、普通なら、ワーワー、キャーキャーはしゃいで、楽しく泳ぐはずなのに、誰も言葉を発しないのです。上流階級のお嬢様方だから躾がいいのだろう、と勝手に納得していました。後で監視人が教えてくれたのは、彼女たちは全員が聾・者だということでした。いろいろな場所で、特権階級の人々の横暴さを見てきたので、きっと特権階級のお嬢様方なのだろうと、思い込んでしまった自分を恥じました。ソ連には特権もありますが、弱者に対する配慮・サポートがとても厚いのです。物事は一面だけで捉えてはいけない

という教訓です。幼少期に、川は「東から西に」流れるものと思い込んでいた自分を思い出しました。

モスクワ駐在の２年目の1971年９月11日。フルシチョフ逝去の情報が突然、入ってきました。スターリン亡き後、ソビエト共産党第一書記として最高権力を振い、東西融和を進めた一方で、核戦争一歩手間のキューバ危機を起こしたフルシチョフでしたが、最後にはブレジネフ一派に追い落とされ、わびしい年金生活を送っていました。

フルシチョフは歴代最高権力者が埋葬される赤の広場脇ではなく、モスクワ郊外のノヴォデヴィチ修道院の墓地に埋葬されるとの情報をつかみ、その葬儀の様子を特ダネにしようと朝暗いうちに修道院の墓地に潜り込み､100フィートの16ミリフィルムの入れたカメラをコート下に隠して待ち構えました。夜明けとともに警察がこの修道院の周囲の交通を封鎖し、外部との行き来を遮断しました。勿論、私は中にいます。他のマスコミは、みんな封鎖線の外側です。フルシチョフの息子は、墓を掘った土の上に立ち「今父は寂しいこの場所に埋葬されるが、いつか必ず再評価される時が来る」とのスピーチを行い、私はその模様をフィルムに収めました。100フィートのフィルムは時間にして３分ほどです。短い映像ですがまさに特ダネです！

外国の特派員たちは、ソビエトでの取材内容については、当局の検閲を受け、許可を取らないと取材フィルムを国外に持ち出すことはできません。さあ、どうしてこれを突破しようか？　私はツイていました。その日は公式訪問をしていた鹿児島県の金子知事一行が帰国する予定でした。直ぐに金子知事にお会いし、「この包みを日本に持って帰り、羽田空港で出迎えのNHK職員に渡して欲しい」とお願いしました。金子知事には中身が何であるかは説明しませんでしたが、知事は剛毅な方で、中身が何かを聞かず承知してくれました。

知事はVIP扱いなので、外交官と同様に手荷物検査などはありません。金子知事が羽田でタラップの下で待っていたNHKのオートバイさんにそのまま渡してくれました。

その日の夜７時のNHKニュースのトップで、このフィルムに収めた葬儀の模様が「フルシチョフの寂しい葬儀」というタイトルで報道されました。世界中が驚きました。NHKのモスクワ支局長は、その後の当局からの反発を恐れ、東京にこれ以上ニュースで流さないよう指示しました。勿論、私はソ連当局からの懲罰を覚悟しました。しかし一切お咎めはありませんでした。ソ連当局もすでに影響力のない人物の葬儀だからと大目に見てくれたのかと思いますが、なぜ咎めがなかったのか今もって謎です。

このことがあった後NHKの名物キャスターとして名を馳せた磯村氏が報道局長に就任され、特派員改革を進めていました。磯村さんは、記者が外国の支局勤務に任命されるとまるでその支局の主のように腰が重くなってしまうが、特派員はすべからく担当の地域全体を自分の足で取材して生きた情報を伝えるべきだという考えでした。磯村さんはこれを移動特派員 roving correspondent 制度と名付け、まずアラブ諸国担当と東ヨーロッパを担当する特

派員を任命しました。私はその一人、東ヨーロッパ諸国担当を命ぜられました。移動の基地はオーストリアのウィーンということで同僚たちは羨ましがったようですが、ことはそう簡単ではありません。まず私はドイツ語がほとんどできない。２歳になったばかりの息子に妻は臨月に近い身重だ。その私が前任者もいないウィーンへモスクワから直に赴任し、事務所を設置して、その上に民族も言語も国の成り立ちも全く違う国々を取材して歩けというのですから何とも無理難題な任命です。その仕事が曲がりなりにもできたのは若さと体力、妻の協力、そして行く先々で仕事に理解を示して協力してくださった方々がいたからです。

その異国でも人間は住んでいます。この時こそ、国を超えて、人情の大切さを痛感したことはありませんでした。手を差し伸べてくれたのは、ウィーンの女医グランデさんです。子供の診察に往診してくださり、診察後には私達としばし雑談をしてさまざまな助言をしてくれるのです。この雑談で私達一家はすっかり安心しました。医は仁術と言いますが、私たちはグランデさんには心から感謝しています。

ウイーンには当時から世界に大きな影響を与え続けているOPEC（石油輸出国機構）の本部があります。私は石油ビジネスについては全くの門外漢です。一生懸命石油関係の勉強をして、OPECで絶大な力を持っていたヤマニ石油相とのインタビューを狙いました。

しかし中東諸国の文化には難しいしきたりがありました。彼らは基本的に断らないのです。逆に言えば、Yesと言われても、Yesではないことが往々にしてあるのです。しかし、粘りに粘って、何とかヤマニ石油相とのインタビューの承諾を取り付け、オーストリア人のカメラマンとホテルで待ち構えました。ヤマニ石油相がホテルに帰った時腕を掴むような強引なやり方でカメラの前にお連れしました。私の質問に「これから石油は安くはならないだろう。価格も君が言うよりもかなり高いものになるだろう」との発言を引き出しました。当時のカメラは100フィートのフィルム用で、わずか３分足らずの長さです。カメラマンがフィルムを入れ替えようとしたとき、石油相はサッと立ち上がり、インタビューは終わり。しかしOPEC最有力者の具体的な発言は話題のニュースになりました。この放送が出た後、私があたかも石油問題に詳しいのではないかと勘違いをして質問をしてくる方もいて、私は苦笑いをすると同特に、TV報道の重さを痛感しました。

ジャーナリストの仕事をしていて驚くことはいろいろあります。人との縁もその一つです。オーストリアのインスブルック冬のオリンピックの放映権交渉をしていた時のことです。オリンピックの放映権は巨額で、NHKも会長が直接交渉にインスブルックにやってきました。会長には通訳兼チーフ・コンパニオンのシルビア・ゾンマラート女史がアテンドしてくれました。美しくとても賢い女性でした。交渉を成功裡に終えて私は５年ぶりに東京に転勤し外信部勤務になりましたが、ある日電送されてきた写真を見て驚きました。なんと彼女とスウェーデンのグフタス国王との婚約発表の写真でした。お二人の共通の趣味スキーが取り持った縁でした。嬉しくなって祝電を送ったことはもちろんです。

80年代に管理職になり、嫌な仕事も引き受けなければならないことも多くなりました。

中東ではイラン・イラク戦争や、テヘランでの米国大使館占拠事件等、様々な取材をしましたが、結局は人間性つまりは、人の振る舞いが大事だと痛感したのがこれからお話することです。

1979年石油大国イランでは民衆の蜂起でパーレビ王政が倒され、ドイツに亡命中だったイスラム教の高僧ホメイニ師が帰国してイランは厳格なイスラム教の教義に基づく国に変わりました。イスラム教徒はパーレビ王制を支持してきたアメリカ大使館を襲撃して、館員数十人を拉致してその行方がわからないという混乱の時に、下端管理職になったばかりの私にテヘラン駐在の異動命令がでました。イスラム世界のことは知識も乏しく、ペルシャ語も知らない特派員です。現地で採用した助手達にどっぷりと頼らなければなりません。彼らは王政時代にアメリカの大学で学び役所の幹部だったような人たちです。言葉も不自由でイランの事情にも疎い、にわか支局長の助手を務めるのには、相当に屈折した気持ちを持っていたと思います。それが特派員の仕事に露骨に影響したというのがこれからお話しすることです。

テヘランに赴任して二ヶ月後支局にしていた高層ホテルのベランダから北の方向に黒煙が激しく上がるのが見えすぐに停電になりました。通信回線が遮断され、日本との唯一の通信手段のテレックスも働かなくなり仕事はお手上げ状態です。後から分かったのはイラクがイランを空襲したということですが、初めは何が何だか皆目分かりません。

さてそんな時、皆さんだったらどうするか考えてみてください。

私も内心は慌てました。何が起こったのか、どうしたらいいのか？　その答えがないまま助手達を集め私がやったことは一種の賭けです。皆に言ったことは「通信回線の途絶は２日で回復するだろう。その間に町の人々の様子などを取材しておこう！」ということ。助手の中にはアメリカのマサチューセッツ工科大学出身のインテリもいて「２日間で回復するという根拠は？」と質問。当然の疑問だが私に情報があるわけではない。しかしできる限り平静を装って一言「私の体験に基づく判断だ！」。今から思い返してもなんとも厚かましい言い方だが、助手達がわかったふりをして市民の動きや市場の様子などを取材してくれました。

私のこの大ボラがなんときっかり二日後に現実になり、通信回線が復活し日本への衛星中継も実現したのだから不思議です。助けてくれたのがアラー様なのか仏様なのかわかりませんが（笑）。衛星中継は灯火管制で真っ暗な中星空を頼りに無灯火の車でエルブールズ山の麓のテレビ局に運んで、ほとんど明かりのない中で東京への衛生中継に成功した感激を皆さん想像できますか。強調しますがイラン・イラク戦争始まって初めてのイランからの映像です。

この私の自慢話には学生の皆さんにぜひ記憶しておいて欲しいポイントがあります。この時テヘランには外国特派員がもう一人いました。日本の民放の記者で仕事熱心な人でした。ところがその記者が衛星中継で映像を送ろうとすると毎回うまくゆかないのです。理由はまったく分かりませんでしたが、二ヶ月後任務を終えて帰国直前にその謎がわかりました。イラン・イラク戦争が始まって二ヶ月間の取材は首都テヘランだけではなく両国国境のホッ

ラムシャフルの最前線に行き、地獄とはこういう所かと恐ろしくなった体験もしたが、生きて帰ってみれば稀有な体験で今では懐かしくさえ思い出されますが、それは割愛してお話しするのはぐっと身近な話です。テヘラン駐在の間イラン人の助手達がよく働いてくれたことは話しましたが、私が帰国する時助手達がささやかな送別会を開いてくれました。戦争が始まって文字通り命に関わる状況も体験した仲間ですから別れも気持ちがこもっていたことは想像できると思います。その席で助手のリーダーだったマーサ君の挨拶に仰天しました。「コバヤシさん、ご苦労様でした。あなたは戦争が始まった直後に日本への衛星中継に成功しましたが、もう一人の日本人特派員は中継に何回も失敗したことを覚えているでしょう。なぜ失敗したかご存知ですよね？」「知らない」という私に彼が説明したことに仰天しました。理由はその民放の特派員のもとで働いていた助手の妨害だったというのです。説明によるとその特派員は仕事熱心で、その余りに助手への要求も厳しく、ある時みんなのいる前で助手の一人の失敗を取り上げ怒鳴りつけたことがあるのだそうです。みんなの前で面罵され恥をかかされた助手はそれを恨みに思って復讐の機会を狙っていた。戦争が始まって特派員の仕事が一番問われる時にその助手は衛星中継の薄暗い部屋で回線のジャックをこっそり引き抜き妨害したのだとの説明でした。ひっくり返るほど驚きました。

まかり間違えば私がその被害者になっていたかも知れないのですから。助かったのは私がいろいろな国々で現地のカメラチームなどと働き、その時の体験で若い日本人特派員と働く時の現地の人たちの屈折した気持ちも何回も感じていたので、不満があったとしてもそれを他の人たちの前で問題にするようなことはしませんでした。イスラムの世界には「恥をかかされたら７代に渡って記憶し復讐しなければならない」という教えがあるのだという助手の話は、今でも世界の争いごとの背景を考える時にいつも頭に浮かびます。

特派員の仕事の醍醐味はこれまでの話で感じたかと思いますのが、私のキャリアの中でソ連のゴルバチョフは特に印象深く、何回もロングインタビューをして特別番組を作ることができました。非常に誠実な人物でした。インタビューも、本人とインタビュアーが、互いに聞き取りやすい距離どころか、手と手が触れ、目と目がすごく近い距離で誠実に情熱的に私の質問に答え、人の心を掴む指導者でした。特にその目つきには誠実さが滲み出ていて、インタビュー番組の画面からはそのことがはっきりと分かります。人と話す時の目線はとても大切です。そしてもう一点、優れた指導者の陰には必ず優秀な知恵者がいます。

この男性の顔を見てください。この人の顔を一言で表すならば、私は「重厚な顔」と表現します。彼の名は、アレクサンドル・ヤコブレフ。ゴルバチョフの首席補佐官であり、まさにゴルバチョフの後ろにいた知恵者です。彼は長い間ソ連を支配していたブレジネフ書記長に嫌われカナダ駐在大使に飛ばされていた時に、農業問題の視察に訪れたゴルバチョフと知り合って意気投合し、ゴルバチョフが最高指導者になると同時に知恵袋の首席補佐官となって活躍していました。しかしこの名コンビでも共産主義で70年以上続いてきた体制の欠陥は数年で変わるほどやわな物ではありませんでした。

1991年春にゴルバチョフが初めて日本を公式訪問した帰路の特別機の中でヤコブレフさん

はゴルバチョフに辞表を提出して引退してしまいました。世界が驚きました。私は勿論ヤコブレフさんに会いに行きました。最高指導者の首席補佐官を退いたヤコブレフさんの事務所は市役所の一室で、机が一つあるだけ。机の上にはお孫さんの写真が置かれていました。クレムリンの中の立派な執務室とは雲泥の差です。ゴルバチョフは一体何を考えているのだという疑問が真っ先に浮かびました。インタビューではヤコブレフさんは、ゴルバチョフが改革の遅れに苛立って軍や農業団体など保守勢力との妥協を始め、ヤコブレフさんの忠告に耳を貸さなくなったために辞任したと具体的に話してくれました。そして最後の一言は「ゴルバチョフが危ない！」でした。

私はすぐにこのインタビューを放送すべきでした。この情報は直ちに東京に伝えましたが、あいにくNC９（午後９時のNHKニュース）のメインキャスターが夏休みを取っており、私はメインキャスターが伝えるべき情報だと考えこのインタビューはメインキャスターが戻るまで放送を待つように依頼しました。正直に言えば私は功を焦ったのです。放送のタイミングを待っている間にヤコヴレフさんの警告が現実になりました。軍や党の保守勢力、農業団体などが計らってゴルバチョフが休暇中にクーデターを起こしたのです。自分の仕事を大きく見せようというケチな根性のために、ヤコブレフさんの警告を生かすことが出来なかったのです。私のキャリアの中で最大の失敗でした。あの時に放送で警告していたらロシアはどうなっていたろうか、世界は今と違っていたろうかと、今でも時々自問する大失敗です。皆さんが同じような立場になることがあったらどうしたら良いか、ぜひ心の隅に忘れないでいて欲しいと思う私の失敗です。

ゴルバチョフ大統領とライサ夫人のお話をしましょう。

共産主義ソ連の最後の指導者になったゴルバチョフ書記長そして最終的には大統領になりましたが大変魅力的な人物でした。ソ連では夫婦が揃って政治の表舞台で活躍するということは希薄だったのですが、ゴルバチョフさんの場合は夫妻が共に表舞台に出て活動し、その言動が知的で明るく人々を惹きつけたからです。私は何回もインタビューをしましたがその最後になったのは1999年春に夫妻がアメリカ講演旅行に招かれた時の取材です。ニューヨークにあったウォールドーフ・アストリア・ホテルで落ち着いた雰囲気で話を聴くことになりました。ライサ夫人は1991年８月のクーデター事件のショックで言語障害になって治療を続けていたのですが、ようやく人前でも話せるまでに回復し、インタビューを受けるのは初めてでした。そんな貴重な機会ですから私の意気込みも分かっていただけると思います。NHKのチームも意気込んで重厚な机や椅子を並べ、特別なインタビューセッティングをしました。ゴルバチョフ大統領がライサ夫人を伴って、この部屋に入ってくるなり、「これじゃ駄目だ！」と言って、「ライサ、ちょっと手伝って」と言いながら、いつものように私との距離を膝と膝がぶつかる位の間隔まで縮めました。スタッフが唖然とする中でインタビューは本当に気さくな雰囲気で楽しく行われました。その時の雰囲気をちょっとビデオで見てください。おしどり夫婦の雰囲気がわかるでしょう。

でライサ夫人の肉声をお聞きください。

（小林先生のインタビューに答えるライサ夫人の VTR を少し放映）

実は、ライサ夫人の肉声を録音したのは本当に貴重なものです。このインタビューを入れたドキュメンタリー番組は４月25日に「21世紀への奔流　誤算なき未来へ」と題して放送されました。夫妻も私も心を込めて世界の平和を希求するドキュメンタリーだったと思います。しかしその４か月後、ライサ夫人は急性白血病でこの世を去りました。このインタビュー VTR はとても貴重なものになりました。ゴルバチョフさんも昨年９月に亡くなり私が取材した方々が次々に他界していますが、記録は映像として残っています。もし皆さんの中から私が辿ったような仕事に興味をもってくださる方が出るといいなと思っています。

さて、最後にプーチン大統領の話もしなければなりません。

ご存知のようにプーチン大統領は KGB（旧国家保安委員会）の出身です。プーチン大統領にはずっとインタビューの申込をしていましたが、現役時代には遂にかないませんでした。

私が NHK を退職し、作新学院の大学教授をしていた2003年５月パノフ駐日ロシア大使から、夜中に突然電話が入りました。「小林さん、プーチン大統領が３日後にお会いするといっている。間に合いますかね？！」ヴィザなどの手続きは大使館がすぐに対応してくれて私はモスクワにすっ飛んで行きました。指定された日の午前10時クレムリン宮殿の大統領執務室の脇の部屋にインタビューの準備が整っていました。でも大統領は現れません。

普通の人なら慌てるところですが私は長いロシア暮らしで“モスクワ時間”は心得ています。この国では予定の時間通りにことが進むというのは稀です。お茶をいただきながら待つこと２時間、大統領府の係官が「大統領は郊外の公邸でお会いすることになった」と言う。モスクワの西の郊外20キロ鬱蒼とした森に囲まれた公邸に大統領府の車で移動。部屋にはすでにインタビューの設定ができていて、警備員が待機していたが大統領はすぐには現れない。３時間ほど待ってようやく大統領が現れた。私の第一印象は「しめた！」。大統領には「ざっくばらんな話を伺いたい」と伝えてあった。大統領はポロシャツ姿だったのです。話は貧しい家に生まれ小さい時はよく喧嘩をしていたが力をつけるために柔道場に入門した話から始まりました。「真っ先に師が柔道は礼だよと言った。何にもわからなかったが練習を重ねるうちにその意味がわかってきた。柔道と出会って私は助けられた。もう喧嘩をしなくても力を見せることができると分ったからだ」と言う。面白い話の時間が経つのは速い。予定の１時間が過ぎたところで傍に控えていた報道官が仕切りに時計をみてこちらに目配せをする。私は気が付かないふりをする。しかし報道官の立場も考えてやらなければならない。頃合いを見て「大統領、そろそろ時間のようです」と私が言った時大統領が言った言葉に報道官が飛び上がりました。「いや待て！道場を見に行こう」報道官が驚いた理由は後からわかりました。道場は公邸から少し離れた森の中にありました。玄関を入ると加納治五郎の等身大の座像が飾ってあってその横のドアを指して入れと大統領が言う。柔道を知らない私は

入って大恥をかきました。後ろから入ってきた大統領は入り口で深々と礼をしてからはいってきたのです。私の非礼を笑って許してくれた顔は「お主　柔道を知らないな」と言っていたのです。道場の中で柔道の話から大統領の仕事までまるで友達に話すようないい雰囲気で時間が過ぎました。その雰囲気をカメラはきちんと記録してくれていました。予定を大きくオーバーしたのに、プーチン大統領は道場の外まで出て私を見送ってくれました。

驚いたことに外には中国人が大勢待ち構えていました。中国の胡錦涛総書記が初の公式訪問でやってきていたのです。その会談予定を遅らせて私との話に付き合っていたのです。

彼の柔道の師匠は、アナトーリ・ラフリン師。不良少年だったプーチンに柔道を通じて、生き方を教えてくれた師だと、話してくれた大統領の言葉は、朝日新聞から出版された「プーチンと柔道の心」（山下泰治氏と共著）に詳しく書きましたので興味のある方は参考にしてください。

ラフリン師は1940年生まれ。私と同年です。ラフリン師にはプーチンとの面談から３年後の2006年11月に会いに行きました。モスクワ郊外の林に囲まれたスポーツの合宿施設で女子柔道の指導をしていたのです。ロシアだけではなく日本でも大統領を育てた柔道家として高く評価されていた方です。眼光鋭い人で、ロシアの女子柔道の指導者の立場でした。インタビューの冒頭で私が「プーチン大統領は、よくやっていますね」と切り出したのに対しての師の答えに、私は驚きました。「今みんながプーチンはよくやっていると言っている。だが国の最高指導者というものは、３－４年やっただけで評価してはならない。今の段階で浮ついて、上手くやっている等と言えない」と。国の内外から大統領を作った男と称賛を浴びていた時の発言です。その後のプーチンを見ると、ラフリン師の慧眼さに驚くばかりです。

私はこれからまだやりたいことがあります。それは、もう一度プーチンに会って、今回の戦争を起こし多くの人の命が失われていることに、人間として、柔道家としてどう考えているのか、この耳できちんと聴きたいのです。

これが実現できるかどうかは分かりませんが、きっとまた、私を助けてくれる人が現れるのではないかと夢を描いています。学生諸君！長い話を熱心に聴いてくれてありがとう。
諸君の将来に期待しています。

（講義終了）

本稿は創価大学の卒業生である小泉武嗣氏が書き留めてくださった講演録を基に、多少の補足や修正をし終わったのが昨日１月29日。

そして今日30日は東京のホテルニュー・オータニで池田大作先生のお別れ会に伺いました。カーネーションの花に囲まれた先生に参列者が整然とお別れの挨拶をし、そのあと先生の活動の歴史が時代順に写真と共に紹介されていました。嬉しかったのは外国の優れた人たちとの交流の写真。私と随分多くの共通の知り合いがいたことです。生身の池田先生にお会いしたのは一度だけですが共通の知己がたくさんいたことで気持ちが高揚しました。

そして最後のパネルに胸が詰まりました。

「教育は未来を作る創業」と大書されていたのです。

その哲学の元で切磋琢磨する諸君に栄光あれ！

〜終〜